

平成30年3月10日号 (第183回)

阿伎留通信

公立阿伎留医療センターは、医の心を重んじ、患者の生命と健康と生活の質を考える良質の医療を実践し、地域医療の最適化に努力します。

今回の阿伎留通信は、 — 「全身麻酔について」 —

をテーマに麻酔科の余語 久則 医師よりお話しさせていただきます。



■ 全身麻酔は危ないの？

手術を受けるとなると「麻酔が心配！」という患者さんは少なくありません。麻酔が「危ないか、危なくないか」と言うのなら、それは「危ない」です。体に何かしたら危険は付き物です。交通事故に遭いたくないなら家から出ない方が良いでしょう、手術や麻酔の副作用や合併症が心配だったら病院に行かない方が良いでしょうといっても過言ではありません。しかしそれでは病気は治せません。

実際に麻酔で命を落とすという最悪の合併症はどのくらい起きているのでしょうか。近年は各種外科手術の全国統計なども発表されるようになりましたが、危ないと考えられていた麻酔は長年にわたり統計がとられてきました。それによれば全身麻酔が原因と考えられる死亡の割合は20年前にはおよそ10万人に1人だったのが、近年は15万人に1人くらいまで減少しています。

「15万分の1」という数字を高いと考えるか低いと考えるかは受け止め次第ですが、日本で毎年100万人以上の方が手術のために全身麻酔を受けている、すなわち毎年100人に1人くらいの日本人が全身麻酔を受けている現実と、昨年の交通事故死者数3,694人や毎年の自殺者数2万人以上という数字を見ると、全身麻酔は珍しいことではないし、「危なくないとは言えないがけっこう安全」と感じられるのではないのでしょうか。

この割合は、腰椎麻酔や下半身麻酔とも呼ばれる脊髄くも膜下麻酔でもほぼ同様です。手術によっては全身麻酔と脊髄くも膜下麻酔のどちらでも実施できるのですが、近年は全身麻酔の安全性が高まってきたこともあって、全身麻酔の選択率が上がっているようです。

■ 実際の全身麻酔はどのように進められるのか

手術室に入って手術台の上に横になると酸素マスクを口と鼻の上のにせられます。経験された人は「酸素を吸っている間に点滴から薬が入れられて眠ってしまい、目が覚めたら手術は終わっていた」と言います。「眠っていて痛くない間に手術が終わりますよ」というのが一番簡単な説明です。

麻酔を効かせること自体は簡単です。眠っていて痛くなく、勝手に動かないようにするために4種類前後の薬を用いますが、「これらの薬を入れるんだよ」と教えたら中学生でもすぐにできるような仕事です。しかし、それでは大変なことになります。十分に薬を入れると何をしても痛くも苦しくもなくなり、呼吸もしなくなります。普通なら呼吸をしていないと苦しくなりますが、深い麻酔の状態では心臓が止まるほど酸素不足になっても苦痛を感じなくなります。心臓手術でもないのに心臓を止めるわけにはいきません。実際には筋肉の動きを止める筋弛緩薬という薬を用いることも多く、眠ったらすぐに肺に酸素を送るために気管にチューブを入れる「気管挿管」を行い、機械で酸素を送って呼吸をさせる「人工呼吸」を開始して安全を確保します。

■ 全身管理について

気管挿管されて人工呼吸が始まっても安心してはいられません。麻酔と手術中にはさまざまな体の変化が起きます。テレビの医療ドラマで見ると大騒ぎは通常は起きませんが、使っている薬や出血のために血圧がとても低くなったり、不整脈が出て心臓が止まりそうになったり、酸素が十分でなくなったり、あるいはアレルギーが出たりなど、具合が悪くなることはしばしばあります。実は麻酔科医の重要な役割は、「薬を入れて眠らせる」ことよりも、麻酔と手術から患者さんを守ることにあります。これを「全身管理」と呼びます。麻酔科医は知識と経験といろいろな機器を用いながら、患者さんの安全のために一人ひとりの体の状態と手術の内容に合わせて麻酔の薬の量を調節し、必要なら心臓を支える薬を加えたり輸血したりするなどの仕事をしています。そして無事に手術が終了すると、入れ続けていた薬を全部止めます。薬の進歩のおかげで今や若い人で10数分、高齢者でも20分余りで目が覚めてきます。

■ 最後に

今回は全身麻酔と麻酔科医の役割について、「医学的正確さ」は度外視して、医療用語の羅列を避け、おおよそのイメージを描いてみました。最後に、病院や麻酔科医の努力だけではどうにもならないことがありますので、書き加えます。まずは喫煙です。百害あって一利なし、1日1本でも健康に悪いことがわかっています。がんや心臓・血管などの病気を増やすのはもちろん、麻酔・手術中、そして手術の後の悪影響も多大です。最近広まっている加熱式たばこも同様です。また糖尿病や高血圧などの生活習慣病も普段からよく治療していないと麻酔・手術中や手術後に起きてほしくないことが起きやすくなります。「15万分の1」に入りやすい患者さんは多くの病気を持っている高齢者です。より健康的に長生きするためにも、いざ手術と麻酔となった時に乗り切るためにも、普段からしっかり健康管理をすることを強くお勧めします。

阿伎留通信については、バックナンバーを公立阿伎留医療センターのホームページで御覧になることができます。ホームページアドレス(<http://www.akiru-med.jp>)